

気比神宮寺覚え書き

— 古代敦賀津と宗教空間のあり方を考える —

松葉 竜司

1. はじめに

気比神宮寺は、奈良時代初頭の神仏習合譚を伝える寺院の一つである。北陸地方において、これまで若狭神宮寺（神願寺）や気多社の神宮寺と考えられる柳田シャコデ廃寺跡で発掘調査がおこなわれている中、気比神宮寺は所在すらあきらかではなく、宗教活動の一端は断片的な史料でうかがい知れるのみである。

令制下、越前国敦賀郡の領域内にある敦賀平野には、敦賀郡家、松原駅、松原客館、敦賀津、愛発関、気比社と気比神宮寺、祭祀遺跡（松原遺跡）などが存在した。これらの多様な諸施設の関係性をあきらかにすることは、地域社会の具体的なあり方を考える上で一つのモデルとなり得るが、現実には神宮寺に限らず、具体的な様相が判明しているものはほとんどない。

本稿では、この課題を解決する試みの一つとして、『気比宮社記』などの史料をもとに気比社と気比神宮寺を概観し、気比神宮寺の様相を検討した上で、敦賀津周辺の宗教空間と在地社会の景観のあり方を検討したい。

2. 古代気比社と気比神宮寺の動向

（1）文献史料にみる気比社の性格

気比社に関する史料を表1左欄に掲げる。気比社は大宝2年（701）の創建を伝え、文献上の初見は『日本書紀』持統天皇6年（692）9月戊午条の「故増_二封筭飯神甘戸_一。」の封戸割り当てに関する記事である。8世紀後半から9世紀にかけては、神階昇叙に関する史料（史料2・9）と、幣帛を奉り、船舶の帰着を祈るなどといった祈願に関する史料（史料3）がみられるようになる。史料からは気比社が海神・航海神としての役割をもち、国家祭祀の執行や敦賀津（海上交通）の管理（史料10）を担った状況が知られる。

（2）文献史料にみる気比神宮寺の性格

表1右欄には、気比神宮寺に関する史料を掲げた。神宮寺の初見記事は『藤家家伝』武智麻呂伝にみられる神仏習合譚である（史料1）。9世紀以後、気比社関連史料の増加と連動し、神宮寺関係の記事も増加する。9世紀後半には、僧（史料4）、造仏（史料5）、読経（史料6・8）といった寺院の宗教活動の一端がうかがえる史料がみられるようになり、貞観2年（860）には定額寺となり（史料7）、気比社の神階昇叙とリンクする形で仏教活動が活発化したことが理解される。

しかし、『気比宮社記』天元5年（982）の記事には雷火により天元3年（980）に伽藍が焼失し

表 1 史料からみた気比社と気比神宮寺の動向

元号	西暦	気比社の動向	気比神宮寺の動向	出典史料
持統6年	692	筒飯神 廿戸を増封する		『日本書紀』
大宝2年	702	創建?		
霊龜元年	715		気比神宮寺建立?	『藤氏家伝』下(武智麻呂伝)
宝龜元年	770	気比神 幣帛を奉る		『続日本紀』
宝龜7年	776	気比神宮司を置く、従八位官に准ず		『続日本紀』
大同元年	806	神封部 気比神 二百冊四戸 ※天平3年12月10日符 従三位 料二百戸 ※神護元年9月7日符 廿二戸 十戸 廿二戸		『新抄格勅符抄』
承和2年	835	気比大神祝祢宜 正三位勲一等、笏を把らせる		『続日本後紀』
承和6年	839	気比大神宮 神祇官に属する		『続日本後紀』
		船舶帰着を祈る	7年間の修理	『続日本後紀』『気比宮社記』
		気比大神 従二位		『続日本後紀』
嘉祥3年	850	気比神 正二位		『文徳天皇実録』
仁寿2年	852	気比神宮 幣を奉る		『文徳天皇実録』
斉衡2年	855		気比大神宮寺 常住僧5人を置く	『文徳天皇実録』
天安2年	858		気比神宮寺 稲一万束を充てる(造仏のため)	『文徳天皇実録』
貞観元年	859	気比神 従一位、神宝幣帛を奉る	大般若經の写経を気比神宮寺に安置	『日本三代実録』
貞観2年	860		僧10人を置き、定額を為す(定額寺)	『日本三代実録』
元慶2年	878	神宮 火災	仏経転読する	『日本三代実録』
元慶8年	884	気比神宮 封租穀を祭料に用いるため神庫に収納		『類聚三代格』『日本三代実録』
寛平5年	893	封租穀を神宮に先納した後に寺家(神宮寺)に分ける	封租穀をめぐって気比社と紛争	『類聚三代格』
		気比大神 正一位勲一等		『類聚三代格』
		気比神社七座		『延喜式』3(臨時祭)
		気比神宮司 従八位官に准ず		『延喜式』3(臨時祭)
		気比神宮司 笏を把る		『延喜式』18(式部上)
		気比神宮司 諸神主に解由の責		『延喜式』18(式部上)
		気比神宮司 神祇官に属する		『延喜式』18(式部上)
		松原客館 気比神宮司に檢校させる		『延喜式』50(雑式)
寛平9年	897		越前国正税14,153束1把が修理に充てられる	『気比宮社記』
天元3年	980		落雷で伽藍焼失	『気比宮社記』

たことが記されており(史料 11)、その後の本格的な再建を示す史料はないものの、室町後期とされる「気比神宮古図」に神宮寺の姿が描かれているので(若狭路文化研究会編 2018)、中世には復興していることがわかる。

3. 『気比宮社記』

(1) 『気比宮社記』の概要

本論で気比神宮寺を検討する際に用いる史料は『気比宮社記』である。気比社伝来の古文書の写しを編さんし、宝暦 11 年(1761)に完成した社誌で、第一巻(神伝部上)、第二巻(神伝部下)、第三・四巻(祭祀部上・下)、第五・六巻(国史標出部上・下)、第七～九巻(社伝旧記部上・中・下)の全九巻(冊)からなる。

著者の平松周家は、元禄 14 年(1701)、気比社家河端親章の三男として生まれ、宝永 7 年(1710)に社司となり、平松家を継いだ人物である。

(2) 『気比宮社記』の使用にあたって

『気比宮社記』は宝暦 11 年(1761)の編さんであるが、その後、昭和 15 年(1940)に『気比宮社記(翻刻版)』が気比神宮から発行された(気比神宮編 1940)。昭和 38 年(1963)発行の『平安

遺文』（320 太政官符案○氣比宮古文書）は、昭和 15 年発行『氣比宮社記』に補訂、註記が加えられたものであるが（竹内編 1963）、平成 31 年（2019）には若狭路文化研究会から『影印本 氣比宮社記』が発行された（若狭路文化研究会編 2019）。

史料の信頼性は平成 31 年の影印本、次いで昭和 15 年の翻刻版の順に高いものと考えられ、本論では必要に応じて影印本の原文を読み下し（史料 11）、適宜、昭和 15 年の翻刻版を参照した。

4. 氣比神宮寺の検討

（1）『氣比宮社記』天元 4 年官符の内容

『氣比宮社記』第七巻には 9～10 世紀頃の寺院損壊と修理再建の経過を記す。例えば承和 6 年(839)から 7 年間におよぶ修理があり、寛平 9 年（897）と延喜 8 年（908）の記事からは修理工料として越前国正税 14,153 束 1 把が充てられたことがわかる。

史料 11 に挙げた『氣比宮社記』第七巻の天元 5 年（982）の記事は、大中臣良用が知り得た神宮寺の損壊と修理の経過をまとめた記録である。伽藍焼失の 2 年後、天元 5 年、良用は越前国司から氣比神宮寺の再建を命じられ、封戸の租米を費用に充てた。

史料にみられる官符は三通の写本が収録されており、基本的に同一の内容であるが、うち一通には再建のための寺院造営予定目録とも言える記載がある。この史料からうかがえる直近の出来事を含めた寺院修繕や再建の時系列をまとめると以下のとおりとなる。

- ・ 承和 5 年（838）5 月 3 日の符…僧貞徳に寺院の修理を命ずる。承和 6 年から 12 年まで修理。
- ・ 寛平 8 年（896）5 月 28 日の解…神宮寺破壊。
- ・ 寛平 9 年（897）10 月 14 日の符…菅原道真が木工寮に修理工料を計算させる。
- ・ 延喜 8 年（908）2 月 1 日の符…修理工料として寛平 9 年に算出を命じられた稲の使用を小野葛絃が指示。

表 2 『氣比宮社記』にみられる氣比神宮寺の造営予定目録

施 設 （ 建 物 ）					備 考
種 別	構 造	規 模（括弧内の数値は尺）			
		長	広	高	
講堂一字	七間檜皮葺	十丈(30.3)	六丈八尺(20.6)	一丈八尺(5.45)	
南金堂一字	二重、檜皮葺	南北六丈三尺(19.08)	東西五丈三寸(16.05)		
北金堂一字	二重、檜皮葺	南北六丈三尺(19.08)	東西五丈三寸(16.05)	一丈二尺(3.63)	
南塔一基	三重、檜皮葺	三丈八寸(11.49)	三丈八寸(11.49)	六丈六尺(19.98)	
東中門一字	三間檜皮葺	四丈(12.12)	三丈二尺(9.69)	一丈二尺(3.63)	
南中門一字	五間檜皮葺	五丈五尺(16.65)	二丈六尺(7.86)	一丈二尺(3.63)	
西中門一字	三間檜皮葺	二丈二尺(12.72)	三丈二尺(9.69)	一丈二尺(3.63)	
廊四面	檜皮葺、九尺(幅力)	東二十三間、南十九間、北十五間、西二十二間			各門別
経蔵一字	四角、檜皮葺	四丈(12.12)	四丈(12.12)	一丈二尺(3.63)	
垣	百十九間	東三十七間、南三十八間、東北荒垣三十四間			計百九間
南大門一字	檜皮葺	四丈五尺(13.62)		一丈四尺(4.23)	
北寶蔵一字	檜皮葺	一丈九尺八寸(5.97)	一丈一尺(3.33)		
僧坊一字	檜皮葺	十間各丈	一丈六尺(4.83)		
食堂一字	檜皮葺	六丈(18.18)	四丈(12.12)		

1尺30.3㎝に換算(新井2015)

- ・ 天元4年（981）4月27日の解…12月1日に雷火で一切が焼失。敦賀郡司、藤原景康が3月9日に氣比社で祭祀。寺院に何も残っていないことを確認。

（2）氣比神宮寺伽藍の検討

史料11には、表2で示したように建物名、棟（基）数、規模など再建すべき施設の各項目が挙げられているが、これが交替実録帳をもとに作成された造営予定目録であるとすれば、この構成は焼失前の施設と同様で、踏襲されているものと考えることが合理的である。

宮上茂隆氏は『平安遺文』収録の『氣比宮社記』を用いて伽藍復元をおこなった（図1右上）。同氏の復元は講堂を配置することで北面廻廊の間数不足を解消したが、『平安遺文』収録の『氣比宮社記』には記載がある北塔が机上復元されている。

『氣比宮社記』の造営予定目録から復元される伽藍には、以下の特徴がある。①二金堂、一塔が廻廊の中に収まり、垣を含めた寺院全体の建物配置のバランスはよい。②伽藍規模、東面金堂と東側の塔、そして中門・講堂の配置からは観世音式と想定される初期伽藍を踏襲している可能性が想定される。③全ての施設が檜皮葺き屋根を志向しているが、幾度の修理がおこなわれたという史料から考えれば創建初期の瓦葺き建物が天元年間の焼失時まで存続しているとは考えにくいので、焼失伽藍は檜皮葺きであった可能性が高い。

これらの点を踏まえ、造営予定目録に従い、図1に筆者の伽藍復元案を示す。北塔の有無を除き、基本的には宮上氏の復元と大差はない。北塔の存否に関しては、伝来史料に記載があった北塔を宝暦13年（1763）写本時に漏らし、北塔は存在したものとして『平安遺文』の編さん段階に追記された可能性と、現存史料としては最古となる『氣比宮社記』印影本（2019年発行）を見る限りにおいて北塔の記載はなく、もともと北塔が存在しなかった可能性が指摘できる。筆者は後者の立場に立ち、氣比神宮寺の伽藍に北塔が存在しなかったことを積極的に評価したい。氣比神宮寺の伽藍が最初に整った時点の伽藍は、観世音寺式伽藍をもち、寺院の修理、再建等の過程を経て、造営予定目録に近い伽藍となり、天元年間の焼失にいたったものと理解する。

（3）氣比神宮境内出土瓦の年代

発掘調査によって氣比神宮寺の様相はあきらかにされていないが、平成5年（1993）に氣比神宮境内採集とされる丸瓦1点、平瓦8点、瓦細片1点、10点の瓦片が敦賀市教育委員会に保管されている（図2）。丸瓦は厚く作られ、凹面には布目痕が残る（図2-1）。平瓦凹面の布目がごく細かく、桹板圧痕はなく、平瓦の側面は凹面側で鋭角となる（図2-2～4）。平瓦は一枚づくりで、若狭・越前での一枚づくり技法の出現年代から考えて採集瓦は8世紀後半以後に伴うものと考えられる。

現在の氣比神宮境内には舍利孔をもつ心礎が存在するとされており^{（1）}、堀大介氏によって8世紀前葉の創建が想

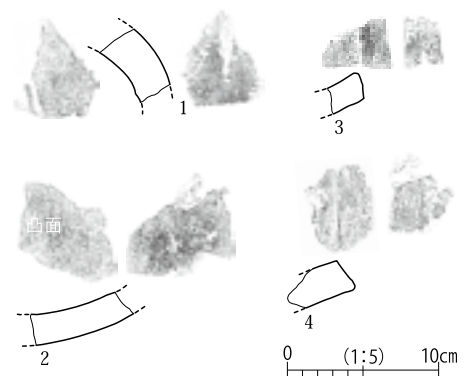


図2 氣比神宮境内採集瓦実測図

定されている（堀 2019）。しかし、北陸地方では神宮寺の伽藍整備は建立初期の年代からは遅れる傾向にある。若狭神宮寺は和銅 7 年（714）、泰澄の弟子、沙門滑元による創建が知られ（『類聚国史』）、寺域内からは白鳳期建立の太興寺廃寺で出土するものと同系譜の丸・平瓦も出土しているが、平城宮系軒丸瓦が伴う塔の建立など本格的な伽藍造営は 8 世紀中葉以後以降る（松葉 2015）。また、気多社の神宮寺と考えられる柳田シャコデ廃寺跡は昭和年間の発掘調査で 8 世紀初頭には寺院の建立が考えられ、平城宮系軒平瓦が出土することから 8 世紀中葉以後にも継続する寺院であることが知られている（羽咋市教育委員会 1987）。また、平成 26 年から始まった近年の発掘調査では、11 世紀以降の回廊・南門・西門などの施設が確認されている（中野 2022）⁽²⁾。

このような傾向を踏まえると、気比神宮寺境内出土瓦の帰属年代である 8 世紀後半以後に気比神宮寺の伽藍整備期が存在した可能性が高いものと考慮される。瓦葺きからなる初期神宮寺が実在し、本格的な伽藍整備の段階があり、10 世紀にかけて伽藍改変や瓦葺きから檜皮葺きへの屋根部材の葺き替え、金堂の増築による二金堂の配置という現象が生じ、『気比宮社記』から復元されるような伽藍が整ったものと理解しておきたい。

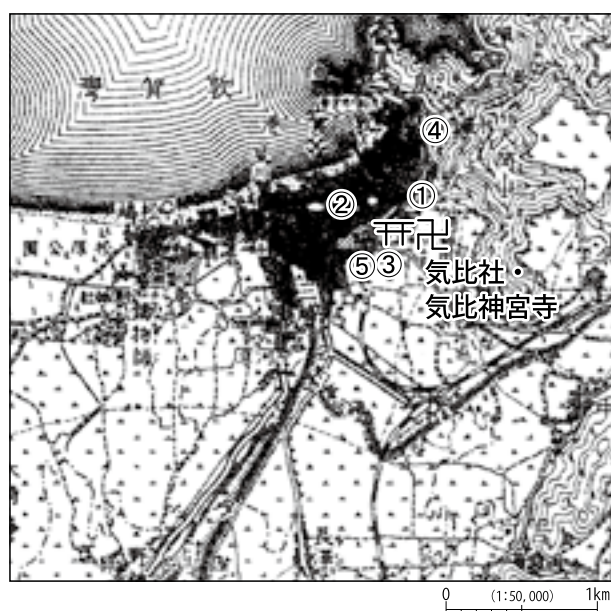


図 3 気比神宮寺の所在比定位置図

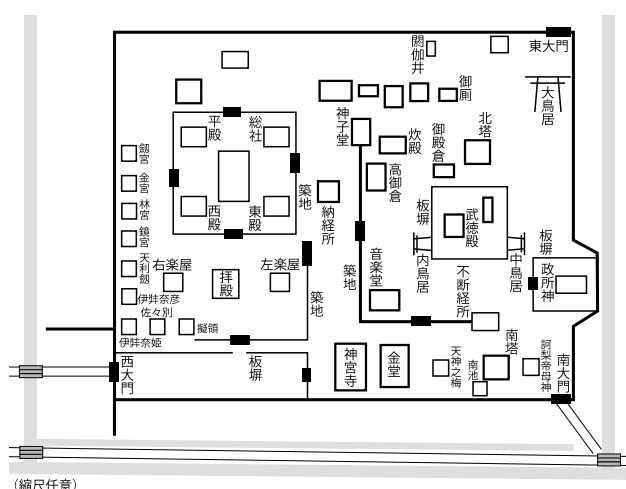


図 4 『気比神宮古図』に描かれた建物配置

的な伽藍整備の段階があり、10 世紀にかけて伽藍改変や瓦葺きから檜皮葺きへの屋根部材の葺き替え、金堂の増築による二金堂の配置という現象が生じ、『気比宮社記』から復元されるような伽藍が整ったものと理解しておきたい。

5. 気比神宮寺覚え書き

(1) 気比神宮寺の所在地

気比神宮寺の所在候補地として、いずれも現在の気比神宮の周辺に以下の 5 か所が推定されている（①～③高早 2001、④・⑤外岡 2019）（図 3）。①幸臨寺背後から南の手筒山の出岬にかけての寺尾。幸臨寺と三重塔（戦災焼失）がその名残とされる。（『敦賀志』一）（史料 12）。②御所ノ辻子（敦賀市元町・桜町）という言い伝え（『敦賀志』一）（史料 12）。③滝本院周辺（廃絶）。春鷺山神宮寺と称する。（『敦賀志』二）（史料 13）④金前寺周辺（『建曆社領目録』『気比宮社記』）（史料 14）。⑤善妙寺周辺（『建曆社領目録』『気比宮社記』）（史料 14）。しかし、いずれも地誌に記されたものであり、近世以後の神宮寺である可能性が高い。

『気比宮社記』からうかがえる天元年間の再建構想の伽藍が焼失前の伽藍を踏襲するものであれば、少なくとも9～10世紀における神宮寺は堂塔を備え、一定程度の規模を有する整った本格的な伽藍であったと理解されるので、山麓や山間部に所在したものとは考えがたい。

室町期の絵図とされる「気比神宮古図」に描かれた中世段階の神宮寺は、気比社の南東隅の社地の一角に講堂と考えられる建物や金

堂、南塔が、そして社地の北東隅に北塔が描かれている。図4に絵図の模式図を示すが、厳密な伽藍配置はさておき、中世段階の神宮寺の寺域は社地東側に求められる。

気比神宮境内出土古瓦の存在、伝・塔心礎の存在から、前章で予察したように現在の気比神宮境内地もしくは、その付近に古代にさかのぼる神宮寺の伽藍が存在する可能性は高い。堂前（堂之前）という小字地名が現在の気比神宮の南々東にみられ（田保 1983、気比史学会編 1988、田中・大森 1992）、中世神宮寺が古代神宮寺の所在を踏襲しているものと考えれば、創建段階の神宮寺も気比社の東側一体に求められるものと考えられる⁽³⁾。

（2）気比社・気比神宮寺が形成する宗教空間

中世以前の気比社の西側一帯には、東の入り江（ラグーン）と呼称される潟湖が展開したものと推定されている（南出 1978・1994、図5）。正安3年（1301）の時宗勢力の敦賀進出時に大規模な整地によって低湿地環境下の陸化が図られたものと考えられる（岩本 2008）。この時の大規模な土地開発は「他阿（遊行上人）の砂持ち」という地元に伝わる伝承からもうかがえ、遊行自ら土砂を運んで潟湖を埋め立てるという遊行上人縁起絵に描かれた姿は敦賀湾全体の潟湖と中世の土地開発の景観を観念的に描いたものと理解される。

古代敦賀津の環境は潟湖と浜堤（小砂丘などの微高地）からなり、西の入り江（ラグーン）周辺には敦賀津、松原駅、松原客館、鎮火儀礼に伴う遺構が確認されている松原遺跡が展開するなど、陸・海交通の結節地であり、人やモノが行き来する交通空間であったものと理解できる。一方で、気比社と気比神宮寺が所在する東の入り江周辺は、社寺に面し、神祇祭祀や神仏祈祷を執行するための宗教空間であったものと考えられるとともに、気比社・神宮寺の南東、敦賀平野東縁の敦賀市中・大蔵に所在が推定されている敦賀郡家や、越前国府とを結ぶ交通路の起点でもある。

潟湖の西側と東側で空間の利用目的が異なることから、敦賀津の機能は東西で分けられていたことが想定されるが、このようなあり方は福良津が渤海交渉に関わる能登の重要な港湾施設であったことに対して、やや距離が離れるが南方約21kmに気多社と柳田シャコデ廃寺跡を有する邑知潟が所在し、さらに邑知潟地溝帯を経て能登国府へと向かうという構造と通じている。

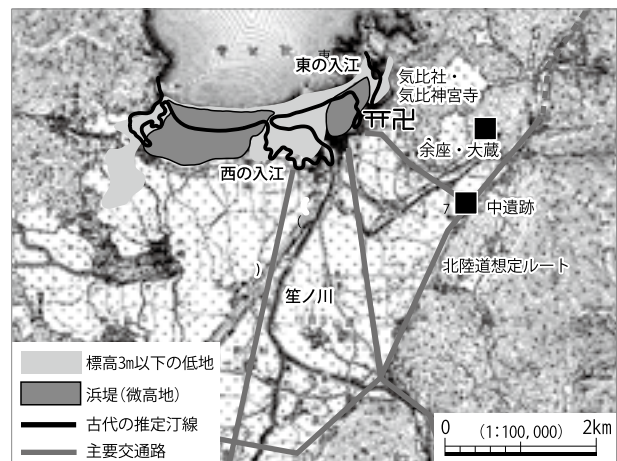


図5 敦賀津周辺の古環境

(3) 津湊と社寺からなる宗教空間

琵琶湖北岸の津湊の一つに塩津がある。塩津港遺跡の発掘調査によって、11世紀後半から12世紀の神社遺構、12世紀以後の垂直護岸施設などが確認され、小型鏡・銭貨などが出土するなど、古代後期から中世にかけての宮都と敦賀津との中継地としての津湊の一端があきらかとなった（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2019・2021）。また、能登・邑知潟周辺では寺家遺跡や柳田シャコデ廃寺跡の発掘調査によって、8世紀以後、気多社と気多神宮寺が並置され、寺家遺跡では鎮火儀礼に伴う遺構や小型鏡などが伴うなど、北方世界との境界でもある福良津や鹿島津とも関係し、気多社と古代神祇祭祀、あるいは仏教信仰とも連関する宗教空間の様相があきらかになりつつある。

この両者の間に位置するのが敦賀津であるが、この地は記紀にみられる海上交通説話や奈良時代以降の人やモノの往来に関する史料、明治期の鉄道敷設や現代にいたる主要な貿易港であるなど、日本海側の重要な海上交通拠点として機能した通史をもつ。

律令期における北陸各地の津湊では、物流の拠点に加え、渤海使などの国外使者の安置や境界祭祀の執行などの役割を果たしたが、敦賀津においても松原遺跡では鎮火儀礼や小型鏡が伴い、また文献史料から松原客館の所在が推定されるなど、東日本海海上交通の玄関口かつ北陸諸国と中央をつなぐ中継地として機能したものと考えられる。

このような中、8世紀前半には気比社と気比神宮寺の建立が文献史料から確認でき、塩津と塩津港遺跡（神社）、福良津・邑知潟と気多社との関係と同様、敦賀津と気比社・気比神宮寺においても津湊と社寺との関わりは密接である。とりわけ、気多社と気比社は神階昇叙が著しく、国家レベルの祭祀がおこなわれたことも知られるが、津湊と宗教施設との関係を考える上で、敦賀津と気比社、気比神宮寺は重要な位置を占めていると言えよう。

6. おわりに

本稿では、敦賀津周辺の宗教空間と在地社会の景観復原を目指した。気多社を例に見るように、重要な地位にある津湊の近郊には神階が高い神社と付随する神宮寺が配置され、水上交通に伴って国家レベルの祭祀が執行されるあり方が存在したものと推測されるが、同様な構図が敦賀津周辺に認められることは、今後、改めて敦賀津の重要性に留まらない、各地の主要な津湊と宗教施設との関係性を考える上でも重要な視点を提示していると考ええる。

30、40代を過ぎた敦賀から遠く離れ、縁遠くなったが、今後、この地域の歴史研究がますます進展し、多くのことがあきらかになることを願って止まない。

末尾となりましたが、本稿の執筆にあたっては京都府立大学 菱田哲郎氏、諫早直人氏、そして考古学研究室の諸氏にご指導、ご助言を賜りました。気比神宮境内採集瓦の資料調査にあたっては敦賀市教育委員会 奥村香子氏にご高配を賜りました。また、小嶋芳孝氏、小林裕季氏、中野知幸氏には柳田シャコデ廃寺跡や塩津

港遺跡に関して多くのご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

註

- (1) この塔心礎とされるものは、現在の氣比神宮境内の南東側にある池の近くが所在するとされるが、私は確認することができなかった。
- (2) 現時点での発掘調査所見について、小嶋芳孝氏、中野知幸氏からご教示を得た。
- (3) 現在の氣比神宮の東側に隣接して、宮内、土手、角神上、角神下という小字地名が見られ、もともとはさらに東側に存在したであろう氣比社が次項で論述したように中世以後の西側への開発によって「氣比神宮古図」に見られるような、まとまった宗教空間が確保されたものと推察される。

引用・参考文献

- 新井 宏 2015 「歴史的な建造物等から求めた尺長の変遷 ―社寺等の建造物中心に―」『計量史研究』37-1 日本計量史学会
- 石塚資元 1977 『敦賀志』玉井昭三編 敦賀美術考古学研究会
- 岩本 馨 2008 「第二章 遊行の砂持ち」から見る湊町敦賀『近世都市空間の関係構造』吉川弘文館
- 上原真人 2015 「第三章 寺院論 第五節 寺院資財帳から国分寺を考える」『瓦・木器・寺院』すいれん舎
- 角川源義・宮 次男 1968 「図版解説」『日本絵巻物全集』第23巻 遊行上人縁起絵 角川書店編集部編 角川書店
- 角川書店編集部編 1968 『日本絵巻物全集』第23巻 遊行上人縁起絵 角川書店
- 門脇禎二 1985 「第三章 古代の敦賀 第五節 古代敦賀の変貌」『敦賀市史』通史編上巻 敦賀市史編さん委員会 敦賀市
- 氣比史学会編 1988 『いま甦るみなとまち敦賀の町並み』氣比史学会
- 氣比史学会編 1994 『松原客館の謎に迫る―古代敦賀と東アジア―』氣比史学会
- 氣比神宮編 1940 『氣比宮社記』巻七 社伝旧記部上 氣比神宮
- 國學院大學研究開発推進機構『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成』神道・神社史料集成（神社資料データベース）氣比神社
(<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db/jinja/300101.html#ninna>)
- 柴原永遠男 2011 「興道寺廃寺の規模と関係氏族」『ここまで分かった！興道寺廃寺～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』美浜町教育委員会
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2019 『塩津港遺跡』1 遺構編・遺物編・遺物編（木簡）
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2021 『塩津港遺跡』2
- 高早恵美 2001 「子安観音堂と氣比神宮寺について」『紀要』第16号 敦賀市立博物館
- 高早恵美ほか 2008 『平成二十年度特別展 氣比さんをつるが町衆 ～氣比神宮文書は語る～』敦賀市立博物館
- 竹内理三編 1963 「天元五年五月 三二〇 太政官符」『平安遺文』古文書編巻二号 東京堂
- 田中完一・大森 宏 1992 「条里復元図 104」『福井県史』資料編 16 下 条里復元図 福井県
- 田保喜兵衛 1983 「大字津内村小字百八十五号迄の字名と其の場所について」『氣比史学』第四号 氣比史学会
- 敦賀市史編さん委員会編 1979 「附図解説 1 敦賀町図」『敦賀市史』史料編第五巻 敦賀市役所
- 外岡慎一郎 2018 「解説」『若狭路文化叢書第14集 影印本 氣比宮社記（上巻）』若狭路文化研究会
- 外岡慎一郎 2019 「解説」『若狭路文化叢書第15集 影印本 氣比宮社記（下巻）』若狭路文化研究会

- 中野知幸 2021 「能登の津湊と宗教施設」『北陸と世界の考古学 日本考古学協会 2021 年度金沢大会資料集』日本考古学協会 2021 年度金沢大会実行委員会
- 中野知幸 2022 「シャコデ廃寺の発掘調査成果」『柳田シャコデ廃寺検討会資料』羽咋市教育委員会
- 西別府元日 2011 「古代宇佐宮と地域社会 ―大分県飯塚遺跡の歴史的な性格をめぐって―」『史学研究』第 271 号 広島史学研究会
- 羽咋市教育委員会 1987 『柳田シャコデ廃寺跡』
- 堀 大介 2019 「神身離脱言説の検討 ―氣比神宮寺の成立を考えるために―」『越前町織田文化歴史館研究紀要』第四集 越前町教育委員会
- 松葉竜司 2015 「若狭国遠敷郡における律令期の瓦生産 ―丸瓦・平瓦を中心に―」『館報 平成 25 年度』福井県立若狭歴史民俗資料館
- 松葉竜司 2021 「若狭・越前における古代津湊と交通」『北陸と世界の考古学 日本考古学協会 2021 年度金沢大会資料集』日本考古学協会 2021 年度金沢大会実行委員会
- 南出眞助 1978 「古代敦賀津の中世の変容」『人文』24 京都大学教養部
- 南出眞助 1994 「歴史地理学から古代敦賀津を復元する」『松原客館の謎にせまる―古代敦賀と東アジア―』氣比史学会
- 宮上茂隆 1975 「越前氣比大神宮寺伽藍について」『昭和 50 年度研究報告集 計画系』日本建築学会関東支部
- 山本 元 1915 『敦賀郡誌』福井縣敦賀郡役所
- 若狭路文化研究会編 2018 『若狭路文化叢書第 14 集 影印本 氣比宮社記（上巻）』若狭路文化研究会・（公財）げんでんふれあい福井財団
- 若狭路文化研究会編 2019 『若狭路文化叢書第 15 集 影印本 氣比宮社記（下巻）』若狭路文化研究会・（公財）げんでんふれあい福井財団

図表出典

- 図 1 宮上 1975 を加えて著者作成
- 図 2 著者作成（資料所蔵 敦賀市教育委員会）
- 図 3・5 旧版地図を基に著者作成
- 図 4 『氣比神宮古図』を元に著者作成
- 表 1・2 著者作成

